

地域若者サポートステーション利用者の学びと社会的つながり

新井英靖*・湯浅恭正**・福田敦志***・吉田茂孝***

(2018年10月24日受理)

Actual conditions and Learning needs of Youths at a Local Support Station for Youth

Hideyasu ARAI, Takamasa YUASA, Atsushi FUKUDA and Shigetaka YOSHIDA

キーワード: 地域若者サポートステーション、ひきこもり、ニート、学び

本論文では、地域若者サポートステーションを利用する若者の実態と、そこで若者が受けている支援内容を明らかにし、ひきこもりやニートの若者の就労支援の方法について検討することを目的とした。その結果、地域若者サポートステーションでは、利用する人に対して社会的活動を通して、自信を持たせたり、自分の困難さを自己理解できるように支援していたことが明らかになった。ただし、社会的活動に自発的に参加するようになるまでは、数か月から数年の間を経ていること、また、どのような活動をどの程度、行うかという点についてはケースによって異なることが明らかになった。

すなわち、地域若者サポートステーションは、若者の就労を最終目標としながらも、そこに向かって一直線に支援をしているのではなく、本人の気持ちや希望、能力をふまえて、スタッフと利用者が「ちょうどよい」距離を保ちながら、時機をみて社会とつながるきっかけを作る支援を行っていた。これは、若者の就労支援には、単に情報を提供する支援にとどまらず、教育的視点をもった利用者との関わりが必要であるということを示唆していると考えた。

はじめに

現在、日本にはひきこもり状態にある者がいる世帯が約 26 万世帯あると推計されている。これまで、ひきこもりの状態にある人やその家族を支援する施策はさまざまに進められてきたが、この問題は、「家庭内に潜在しているため、外部からの支援の手が届きづらく、相談窓口への誘導や自立に向けてのサポートには困難が伴っている」ことや、「ひきこもりの長期化・高年齢化などの課題」があり、「支援の一層の充実及び身近な地域における支援体制の強化」が求められている（厚生労働省アフターサービス推進室、2016、1）。

加えて、日本では、ニートやフリーターに対する就労支援も大きな課題となっており、政府はこうした無就労の若者に対する施策を展開してきた。その一つに「地域若者サポートステーション

*茨城大学教育学部 **中部大学現代教育学部 ***大阪教育大学教育学部

(通称、サポステ) 事業」がある。厚生労働省では、働くことに悩みを抱えている 15 歳～39 歳までの若者に対し、キャリアコンサルタントなどによる専門的な相談、コミュニケーション訓練などによるステップアップ、協力企業への就労体験などにより、就労に向けた支援を展開してきた^{註1)}。その運営は、厚生労働省が委託した全国の若者支援の実績やノウハウがある NPO 法人、株式会社などが実施し、「全国で 100 以上にも上る実践団体によって担われている」(南出、2017、138)。

サポステでは、「様々な職業経験をもつ人、あるいは就職に役に立つスキルをもつ人を講師としたプログラム」を提供して、就業意識を高める取り組みなどが多く行われてきたが、「こうしたプログラムから得た知識や社会的ネットワークを若者が動員可能にするためには、若者のもつ資源(『強み』)を具体的経験に基づいて承認することが必要である」と指摘されている(井上、2016、229)。また、「若者当事者だけではなく、保護者をはじめとする家庭支援や学校教育現場の支援と一体的に実施していくこと」が重要であることも指摘されており(田中、2014、64)、多様な支援を検討することが求められている。

これまでの研究でも、中学校段階で不登校になっている生徒の情報を家庭の同意を得て若者支援総合センターに伝わるようにしていることが報告されている(村上、2013、72)。また、中村らはサポステに来所する若者のなかに、発達障害者が含まれていることを指摘した上で、そうした利用者は多くのケースで「コミュニケーション力の弱さ」があり、「個々の問題の背景を考えること」の重要性を指摘している(中村・橋本、2016、46)。以上のように、サポステ利用者の支援には、本人の精神的サポートやコミュニケーション能力の向上、あるいは家族支援を含めたトータルサポートが必要であると考えられてきた。

近年、この事業では、『事業目標値』が『就労、進学、復学、職業訓練受講等による進路決定者』を指す『就職等進路決定者』から、『雇用保険被保険者資格を取得しうる就職』を達成する『就業者』へと限定されるなど(小山田、2017、70)、就業者率を高めることに主眼がおかれている。しかし、先行研究の知見をふまえると、就労に結びつく実績を上げるためには、地域若者サポートステーションを訪れる若者と家族に、教育的視点をもった関わりが不可欠であるのではないだろうか。

それでは、サポステでは、利用者である若者と家族がサポステを利用する経過においてどのように変容していくのだろうか。特に、サポステの利用者の実態や相談員の教育的関わりの具体的な方法については、これまでの研究において十分に明らかにされていない。そこで、本研究では、サポステを利用した当事者の事例を通して、どのように支援を展開しているのかを明らかにし、若者の就労を支援する方法について検討したいと考える。

研究の方法

(1) 調査内容

本研究ではサポステ事業の一つとして実績のある「さがみはら若者サポートステーション(略称: さがみはらサポステ)」を調査した。具体的には、さがみはらサポステの相談員からサポステ利用者の実態と困難について聞き取り調査を実施し、サポステ利用者に対して、どのような支援を展開してきたかを明らかにする。

(2) 調査日

201×年6月3日に「さがみはら若者サポートステーション（以下、さがみはらサポステ）」を訪問し、相談員から事業内容および利用者の事例について聞き取り調査を行った。なお、聞き取りの内容については相手の了解を得て録音し、テープ起こしを行った。

(3) 倫理的配慮

聞き取り調査を実施するにあたり、「さがみはらサポステ」に対し調査の主旨を説明し、承諾を得た。また、本研究で掲載する事例については、利用者本人またはその保護者から事例の提供について了解を得ているケースのみ調査の対象とした。研究内容を明らかにする際には、個人が特定されないように記述することが条件となっているので、事例を示す際に個人が特定されてしまう可能性のある箇所については、一部脚色して示した箇所がある。なお、インタビュー調査の結果については、論文公表前に内容を確認してもらい、了承を得られた内容のみ掲載している。

「さがみはら若者サポートステーション」の事業の概要

「さがみはらサポステ」は、神奈川県相模原市を拠点として若者支援を実施している^{注2)}。個別相談と各種プログラムの2本立てで支援を行っているが、まずは相談員と面談するところから始めることになっている。相談は1日6枠（9:00～、10:15～、11:30～、13:30～、14:45～、16:00～）が設けられているが、「さがみはらサポステ」では毎週、ほぼ予約で埋まり、新規の面談については、1週間程度、待ってもらうことが多いという。

ただし、個別相談の実施だけでは、引きこもりの若者が社会とつながることは難しいので、「同じ課題を抱える仲間たちと、活動を共にする中で、いろいろな経験を積むこと」を通して、自信につながるというアプローチをとっていた。具体的には、以下のような各種プログラムを用意していた。

表1 「さがみはらサポステ」で実施している各種プログラム

<p>キャリア形成プログラム</p> <p>仕事に直接結びつくようなプログラムで、仲間たちと一緒に就労を目指して活動する。</p>	<p>職業適性検査</p> <p>自分に合った進路を選ぶための検査。自分が何に興味・自信があるのか、また何が得意で何が不得意かを知る。</p> <p>就労準備ワークショップ</p> <p>求人に応募するために必要な履歴書の書き方や面接の受け方の説明と練習をする。また、仕事に就いてから役に立つメモの取り方や雑談の仕方なども学ぶ。</p> <p>ビジネス基礎講座</p> <p>ビジネスマナーや身だしなみ、ビジネスでのコミュニケーションの取り方などを学ぶ。また、就活仲間を作ることも目的にしている。</p>
--	---

<p>アクティビティ交流 プログラム</p> <p>すぐに「就労」に向けて動き出すのが難しい人のために、興味を持った活動に参加し、仲間作りや交流するプログラム。</p>	<p>働くためのカラダづくり（アートワーク） 近隣のフットサルコートでフットサル、体育館でバドミントン、その他卓球やポートボールなどを行っている。女性も初心者もみんな一緒に楽しみながら汗を流し、終わってからは仲間と交流する時間を設ける。</p> <p>社会参加体験① 木彫りのスプーンや貝がらで作ったフォトスタンドなど、様々な手工芸品を作ってイベントに出品する。また、美術館や博物館などの見学にも行く。それぞれの活動を通じて仲間と交流する時間を設ける。</p> <p>社会参加体験②（ボランティア） 近所の公園・道路・商店街などの清掃活動を主に行っている。地域の方たちからの励ましや感謝の言葉を支えに活動している。終了後に、振り返りをしながら仲間と交流する。</p>
<p>社会体験プログラム</p> <p>いろいろな分野で働く人から「仕事や人生の話」を聞いて、働くことや社会に出ることを間接的に学んだり、実際にさまざまな社会体験をしてみようというプログラム。いろいろな大人に出会ったり体験する機会を提供する。</p>	<p>「働き方」発見講座 いろいろな仕事・働き方をしている方や、さまざまな経歴・経験を持つ方をお呼びして話を聞く。色々な仕事があるのを知って職業選択の幅が広がること、人それぞれの生き方があるのを学んで社会に出るハードルを下げることを期待したプログラム。</p> <p>若者支援特別講座 各方面で活躍する方たちをお呼びして、その方の生き様に学ぶ。自身の経歴や苦労話とともに、若者への応援メッセージも語ってもらい、企画や運営を当事者である若者と一緒に進めていけるようにする。</p> <p>就農体験プログラム／農業体験 近隣の農場で、土と作物を相手に身体を動かして働くことで、「生きる力」を取り戻す。またそうして育てた作物や地域の方々が育てた作物を通じて、地域の方たちとともに暮らし・生きる体験をする。</p>

このほかに、「さがみはらサポステ」では、「家族セミナー」を年に数回開催し、若者のおかれていた状況の理解や、家族にできることなどを事例紹介したり、若者自身の体験談などを紹介する形で実施していた。また、相模原市内に在住の利用者については、「さがみはらパーソナル・サポートセンター」を利用することができる。このセンターでは、一人ひとりの課題やニーズに応じて、必要な機関や制度、プログラム等につなぐことを目的とした「機関連携」^{注3)}、他人とのコミュニケーションに不安を抱えたり、社会に出ていくことに不安のある若者たちが、同じような仲間たちと交流するための安全で安心できる居場所の設置、つながりのある事業所や企業で実際に働く体験をしながら、働くことのイメージをつくり、「現場で働ける自分」を確認し、徐々に就労に向けたステップをふんでいくことをねらった「職トレ」、本人が来所できない場合にも家族が相談できる「家族相談」を実施していた。

この中でも、居場所「ホッと」では、毎月1回、土曜日に卓球などのスポーツ大会を開催したり、月に1度の「将棋王・オセロ王決定戦」や、料理作り、地域のお祭りへの参加など、イベントを通して仲間づくりを支援していた。場合によっては、利用者の話し合いで、どんなことをやりたいかを出し合い、新しい活動を企画することもあった。また、「職トレ」には、「短期型職トレ」と「じ

「じっくり型職トレ」の2種類を用意していた。「短期型職トレ」は、2～3日から1週間程度の短期間の職場体験を実施し、仕事をするに対する不安を取り除き、「自分にも仕事ができる」ということを実感することをねらっていた。一方で、「じっくり型職トレ」は数か月から半年程度の期間の職業体験である。長期にわたり職場体験をすることで、社員と同じような仕事をやっていけるのかという点や、職場の環境になじめるのかどうかを見極めることを目的として実施していた。

このように、「さがみはらサポステ」では、単に就労に結びつくプログラムだけを用意して提供しているのではなく、本人の内面の成長や、仲間づくりについても重視していた。こうした事業展開がひきこもり等の若者をサポステに継続して来所し、就労に結びつく基盤となっていた。

サポステ利用者の実態と支援の実際

上記のような事業展開をしている「さがみはらサポステ」の利用者の実態と支援の実際について、以下の3ケースについて聞き取り調査を行った。なお、聞き取りにあたっては、半構造化面接法の手法を取り入れ、インタビュー前に「利用者の実態（サポステを利用する経緯と就労にあたっての困難さ）」「サポステでの取り組みと本人の変容」について話してもらうように依頼した。そして、聞き取りの際には、上記の点についてすべての事例紹介のなかに盛り込んでもらいながら、サポステの相談員に事例の経過を自由に話してもらった。なお、調査者が聞きたいことや不明な点については聞き取りのなかで適宜、質問を行った。

(1) ひきこもる若者と家族が動くとき（事例1）

まず、最初のケースは、「6年間頑張ってきた家族、特に母親が動くとき」というテーマ話してもらった。このケースでは、引きこもりの本人はなかなか外に出ることができなかったので、家族を支援しようと、年に9回ほど家族セミナーという形で行ったケースである。

Aさんは、6年間ひきこもりの状態であった。父は定年退職後、体を壊して療養中であり、母はパートで働いていたが、最近、仕事の時間が減っていた。第1子（長女）が30代前半の女性で、2年間契約社員をしていたが、職場でパワハラにあって退職した。第2子（次女）は20代後半で中学2年生のときから不登校で、ひきこもりの状態が続いていた。過食もあり、体重も増えていた。相模原市在住の保護者であったので、「さがみはらパーソナルサポート」を利用して面談することができた（保護者だけの利用も可能だったため、利用することになった。保護者は無料で利用できることも良かったと言っていた）。

母との1回目の面談で家族の状況がわかった。この家庭は、年金に頼る生活になって6年経つが、年金は減らされてきている。父は病気で働くことができず、母は夕方からのパートで、仕事が減らされてしまい、日中は家族4人がほとんど外にでない生活をしている。先がみえなくて眠れないという相談であった。子どもは2人とも昼夜逆転の状態であったが、サポステに来て、他にも相談者が多くいることを知り、「自分たちだけではないんだ」ということがわかり、少し気が楽になったという。

母との2回目の面談では、「来たら気持ちが楽になって、よく考えたら良いこともありました」

と母が話しはじめた。その良いことというのは、夕飯の買い物に何度か長女と行ったという話であった。長女は料理が上手で、父が早くに家を出る仕事をしているときに、朝早く子どもが起きてお弁当を作っていたことを話した。母にはサポステのプログラムを紹介したが、子どもにはいきなりだと刺激が強いので、「気が向いたら見て」というくらいに、サポステのプログラムを伝えることにした。ただ、サポステの情報をたくさん入れすぎると焦ってしまって、「今度行ってみない？」などと誘ってしまう人もいるので、見極めながら進めることが必要であると思う。ただ、「こういう支援があるよ」ということはお知らせするほうがだいたいは良いことが多い。そして、「いつかは参加できるようにになると良いですね」という形で進めていくようにしている。こうすることでいろいろな方法があることを知るにより、家族は少しずつ楽になるということであった。

4・5回目の面談は、こちらから聞かなくても、母が「子ども自慢」を話し始めた。昼夜逆転している生活なので、この家族は夕食だけは一緒に食べていた。子どもたちは、なるべく人と会わないようにしているので、そうしたすれ違いの生活はよくあることなのだが、このケースでは、サポステの話は父と母が話していることを遠くで子どもが耳にしていた。

面談では、「お母さんがこれだけ頑張ってきたんだから、お母さんも少し楽しいことをしても良いんじゃない？」と話した。母は絵手紙が好きだということで、近くでそういう活動をしているところを紹介した。また、次女が精神科に通っているということであったので、地域活動センターで太極拳やヨガなどを体験するプログラムで、家族の人も参加できるプログラムを紹介した。

こうした活動にはできる限り、同行するようにしている。このようなプログラムに参加している人は、活動に参加しないで見ているだけの人もいれば、活動に積極的に参加する人もいる。こうしたいろいろな人がいることを知ってもらうことも大切だと思っている。

6回目の面談のときに長女がサポステに母と一緒に来た。来所の理由は、母が元気になり、月に1回、出かけていく様子を見て、子どもが「怪しい。宗教に勧誘されているのではないか」と思ったかららしい。サポステのパンフレットを見ても、「良さそうなプログラムがあるのが怪しい、無料もあやしい」ということで子どもが確かめに来たのである。

面談では、「せっかくきたのだから、どのようなところか見ますか？」と言ってサポステを案内した。案内のなかでは、とてもラフな格好をしているセンター長に会って、このような格好の人が一番偉い人ということを知って、変わったところだと思ったらしい。また、サポステを案内されてみると、相談に来ている人がけっこう若い人で、そういう人がたくさんいるということがわかったようである。長女は料理が好きだということを聞いていたので、料理をつくるプログラムがある居場所を紹介し、その日は「来てくれてありがとう」ということを伝えて終わった。

この面談のなかで、長女は妹のほうが大変だと言って心配していた。こうした話をし始めたので、母には席をはずしてもらい、長女と2人で面談した。すると、職場でのパワハラやノルマのきつさがあることを語ってくれた。上司に注意され続けたのだが、自分が悪いと思うところもあって、結局、精神的に鬱状態になったということを知り、短い時間で語ってくれた。

長女は精神科にも通っていて薬をもらいながら治療していた。そのなかで、精神科のデイサービスなども紹介されたが、紹介されたところは「活気がない」と思って、物足りないから参加しなかったようである。面談終了時に長女には、「まだ、本当は宗教ではないかと疑っているでしょう？」と笑いながら聞いてみたら、笑顔で「はい」と言うので、「本当にここが宗教ではないということ

自分の目で確かめたほうが良いですよ」と伝え、長女に通ってもらうことにした。その後、長女は医療機関に行き直して、就労移行支援を利用することになった。移行支援では、「あなたは悪くない」ということを伝えてもらえるところを紹介した。こうした経過をたどるなかで次女ともつながり、次女は精神科と内科に通いながら、サポステに通い始めた。

(2) 自己肯定感から自己理解へ（事例2）

次のケース（Bさん；30歳半ば、男性）は、親からメールが来たことがきっかけで親と面談し、その上で、Bさんへの支援がはじまったケースである。親子が向き直し、自立への道を模索した事例である。

この方は専門学校を出てすぐに就職したが、仕事がきつくて半年で退職した。父の知り合いの製造業の会社に再就職したが、その職場でも同僚と言い争いをして退社したと話していた。後からわかるのであるが、実態は職場の同僚に一方向的に怒鳴られるなどのパワハラがあり、引きこもりになってしまった。ここに相談に来る人は年金生活の親も多く、親はなぜ働かないのかがわからないという思いがあるので、本当の理由があとからわかることもまれではないという。

本人は新しい場所や人は苦手であり、親には言えないが、引きこもりの状態の「今が楽しい」と言っていた。本人には、「こだわり」もあり、自分なりのローテーション（活動の流れ）を崩されるとキレることがあるという。たとえば、予定していた活動を時間の都合で短縮して次のプログラムに移ろうとするとどうしてよいかわからなくなり、怒ることもあったという。また、活動の流れがわからないことなどは、すぐには参加せず、「見ている」だけのことが多かった。こうした特性を理解して、サポステでは、「様子を見取る時間」も必要な人であるとスタッフとは話し合った。

サポステでは、Bさんは自分のことに自信をなくしていたので、できる活動から始めることにした。本人は計算よりも漢字が得意ということであったので、漢字検定を受けることを目指して学び直しが始まった。また、本人は面談が苦手であるとも言っていた。それは、「根掘り葉掘り聞かれる」ことが嫌で、これまでもいくつかの相談支援機関にかかったが、面談の前日は眠れなくなり、食事も通らなくなるということであった。白い壁やガラスごしの相談室は苦手な人が多いものであるが、ここのサポステの相談室もいわゆる相談室風のブースでやるので、緊張してしまう感じであった。そこで、居場所で話を聞くことにした。

実際には、相談に訪れたあと、居場所に行くまでの徒歩10分くらいの間にいろいろなことを話してくれた。たとえば、母親の前では言いたくないことがあるとか、大声が苦手など、本人の苦勞が少しずつみえてきた。その一方で、居場所までの散歩のなかで、この地域のことをいろいろ教えてくれた。居場所に通いながら、友だちができて、本人いわく「生涯、はじめての友だちができた」という。母が作ったお弁当がこれまで食べないといけないと感じて、かえって重荷になっていたが、居場所ではみんなで料理をしたりして食べるのが楽しくなって、お弁当も食べられるようになった。

居場所で本人たちが料理をするとうまくいかないことも多くあるが、居場所のスタッフはその失敗をうまく拾って、活動を支えていた。たとえば、利用者の一人が料理を仕切ってやったら、芯のあるごはんができたときは、スタッフが機転を利かせて「リゾートにしましょう」などと活動をつないでくれる。サポステのような支援機関では、用意されたプログラムのなかに収めよう

とすることもあるが、彼が自分でやろうとすることを大切にしながら、「利用者から拾う」という支援を展開することを大切にしながら関わった。こうした活動のなかで、この事例の青年はサポステに通っていた外国人に漢字を教えるようになった。

引きこもりの人たちは外に出かける機会がなかった人が多い。そこで外に出かける企画を立てようと思った。最初はスタッフからカンパを募って「遠足」などを企画していたが、企画を継続的にできるようにするために、利用者に内職を紹介するなどして、利用者が外に出かけられるお金をもてるようにした。内職はポスティングや草刈りなどだったが、円単位の仕事もあれば、1日7000円くらいもらえるものもあった。ただ、草刈りなどの1日数千円もらえる仕事は、外の活動で体力的にもきつい仕事が多く、そうした活動に慣れていないサポステの利用者たちは、熱中症になりかけたりして、それなりに大変だった。

そういう活動を通して、自由に使えるお金をためて、バーベキューや遠足のような楽しめる企画を立てて実施した。サポステの利用者のなかには、経済的に問題のない人もいて、こうしたちょっとした活動に参加するお金を出せる場合もあるが、サポステの利用者は「自分たちが働いてもないのに、遊んでいいのか」という思いをもっている人はとても多い。そのため、「自分で働いてお金を稼げた」という経験は、よくわかる価値として根付いていったと感じる。青年の活動はお金と直結することなのである。

こうした活動のなかでサポステの利用者が話すことは、部屋に引きこもり、一日中、外出しない生活は本当につらいということであった。「生きているのか、死んでいるのかもわからない。死ぬきっかけもない」という状態であるという。そうしたなかで、自分で稼いだお金なら、楽しむこともできる。これが学び直しの意味であり、スタッフもこの仕事の意味を感じるときだと思っている。

こうした働く体験を通して、自己肯定感が高まった時に、サポステの利用者ははじめて本音で話してくれるようになる。この事例の青年も、こうした活動を経たあとに、工場で働いていたときのことを話してくれた。そこでは、「俺が悪いんだけど」と常に前置きを入れながら、工場ではみんなに笑われ、怒鳴られていたという。最初は、商品の検品をする部署で働いていたが、うまく検品ができずに、次の部署へと異動になる。次の部署では、流れ作業のようなところで働いたが、生産ラインを何度も止めてしまい、また次の部署へと異動となった。次の部署は必要な部品を棚からピックアップする仕事であったが、ここでも間違った部品を持ってきてしまうことが多く、頑張ってもうまくいかなかった。そして、最後に地下で食品を作るのに使う大釜を洗う仕事になった。一日中、大きなおかまなどを洗い続ける仕事は、ここでも怒鳴られ続けた。

こういう状況のなかで、ついに「声が聞こえてくるようになった」という。これは精神的に限界であることを示すサインであったが、それでも父が紹介してくれた仕事だから、父の顔に泥を塗るわけにはいかないもので、毎日遅刻もせずに通勤していた。でも、最終的には仕事のある日は起きられなくなって、世界が本当に白黒に見えるようになったという。しばらく休んだが、欠勤が続いたので、仕事を辞めたということ泣きながら話していた。

サポステを利用するようになり、居場所で過ごしていたときに、みんなでポップコーンを作ったことがあった。ただし、みんなが弱火だと言っていたのに、強火で調理してしまつて真黒なポップコーンが出来上がったこともあった。誰も食べなかったら、外国人の女の子とスタッフだけが口にしてくれた本人は嬉しかったが、自分でも食べてみたらおいしくなかった。

こうした経験は、失敗経験として蓄積していくのではなく、失敗してもみんなで活動することは楽しいことと感じたようである。やりたいことが言える、つらいことがあっても、次の方法がわかる、気分転換できる友達がいる、こうしたことが彼のサポステに通える要因であったように思う。

彼はコーヒーを飲む友だちがほしかかったと言っていた。今まではそういう友達ができなかったのだという。彼は地図で書いてくれるとわかるけど、耳で聞いてもわからないなど、友人関係を築くことが難しい特性があった。これまでは、友だちと約束をしてもわからなくなってしまうので、うまくいかないことが多かったが、サポステではそうではなかった。家でも友達の名前を言って話すようになったことを家の人はとても喜んでいて、また、ほめられることを「ウソだろ」と思わずに素直に喜べるようになったとも言っていた。これまでは、「子どもみたいにほめないでほしい」という気持ちでいたようである。

こうした変化が見られたところに再び親子面談を実施した。親のいるところで職場のつらさを話した。彼はそれまで医療や福祉とは関わってこなかった。彼は医療に行き検査を受けたいと言った。子どものときに当時の支援学級に通うことを勧められたことはあったという。「僕は凸凹があるかもしれない」と自覚するようになり、幼いころ支援学級を勧められたときは嫌だと思ったけど、今は「権利だと思う」という言葉を使って話していた。手帳を取って元気になって、働きたいと言った。

こうした話を聞いた親は「こんなつらいのなら、早く仕事をやめさせてあげればよかった」と話したが、面談では「それは違いますよ。お父さんとお母さんがそんなに一生懸命子どものことを思っているから、彼はそれに応えようとしていたんです。結果はわからないけど、親を思ってここまで頑張ったのだから、自分のことを責めないでください」と母親に話した。彼も、こういう話をしたら親が自分のことを責めてしまうだろうと考えて迷っていたけど、感謝の気持ちでもう一度親子面談したいという気持ちでいたようであった。

彼は、療育手帳は大人になってからでも取れるという情報を得ていたので、この面談の後、医療機関にかかった。良い医者に出会い、手帳を取得し、現在は就労移行支援を利用している。

このケースから学ぶことは、動き出せないのにはわけがあるので、話をしてくれるまではこちらから聞かないということ。また、傷ついた心のリハビリには、好きなこと、楽しいこと、やりたかったこと（映画やカラオケ、プリクラなど若者のやりたいこと）が大切であるということ。そして、本当の自己肯定感は「ありのままにいられる」「自分の中で自分を褒められる—自分も少しはやるじゃん」という気持ちになることだとサポステのスタッフは話していた。

(3) 社会との接点をもつための本人の成長過程（事例3）

最後に、Cさん（21歳の青年）のケースを取り上げたい。Cさんは、小学校から不登校で、中学には行かず、中学の卒業証書はもらったが、単位制の高校には1か月だけ通い、結局のところ中退した。家庭で暴れているということでサポステを利用することになった。本人は移動するのは苦手だということで、近くの居場所で面談をすることになった。

居場所のなかでも、少し古い民家で面談したが、駅で待っていてもなかなか来なかった。おそらく来るのが「嫌だった」のだと思う。実際に会っても、無言の面談が30分くらい続く。本人曰く「生きてても、死んでもいい」という状態であるということであった。そのときは、彼のおじさんのとこ

ろで誰ともふれあわないよう、洗い場の仕事を少しだけして、おこづかい程度のお金をもらっているという状況であった。

面談のなかで「どこか行きたいところはある？」と聞いたら、「Y（家電量販店）なら」と言うので、地域のYで会うことにした。でも本当に会うだけだったが、彼は、約束したことは守ってくれるので、面談という形ではなく、本人がやりたいことを実現しようという方向で関わることにした。

本人に「どこか行きたいところはない？」と聞いたら新宿のYに行きたいと言ったが、緊張してしまい、電車に乗ることができなかった。そこで、ひと駅乗ることからはじめることにした。どこに乗れば人目を気にしないですむかなども一緒に考え、電車の乗り方を練習した。緊張しないためにどのように電車に乗るかを考え、ヘッドホンをしていれば大丈夫ということがわかってきた。それで徐々に一人で乗れる範囲を広げていって、最終的には違う車両にスタッフが乗ることで、一人で電車の乗り降りできるようになった。こうした援助を続けて、14回目くらいの練習でようやく自分で電車に乗れるようになった。

このあと、一人で新宿のYに行くことができた。ただ、新宿は人混みが多くて、疲れてしまったようで、「地元のYのほうが良いです」と言っていた。この後、散歩のなかでいろいろなことを語ってくれるようになった。家の壁には穴があいていること、字を書くのが苦手で、黒板の文字を半分も写すことができないうちに黒板は消されてしまうことが多かったこと、いじめられても、いつもヘラヘラ笑っていて、「やめて」と言うことはできなかったことなどを話してくれた。先生に言ったら、いじめがもっとひどくなったことなども話してくれた。元教師であるサポステの相談員は、いつも「学校で見つけてあげられなくてごめんね」という気持ちで面談していた。

あるとき、相談員とCさんが電車にのったとき、間違っって違う路線に乗ってしまったことがあったが、彼が相談員に任せていたのではダメだと思ったらしく、その後すべてエスコートしてくれるようになった。こうした「超えてくれる瞬間」が大切なのだとその相談員は考えていた。でも、これは演技で失敗したりしたのではダメで、偶然も必要である。相談員のようなよく間違えるタイプの人は、「超えられるチャンス」がたくさんあるから良いと思っている。

自分がやりたいことやできない自分を見せても大丈夫ということがわかってくると、バイクの免許を取りたいと話しはじめた。その理由は身分証明書がほしいからだ。「どこに行ってもあやしまれるから」と彼は言った。

原付免許は運転免許の教習所に行かなくても取れることがわかった。ただ、これはハードルが高かった。まず、写真を取らなければならない、市役所に住民票を取りに行かなければならない、運転免許試験場に行かなければならないなど、彼にとってのハードルはたくさんあったが、自ら一つずつ乗り越えていった。このとき、スタッフが同行するのではなく、家族のサポートが大切であると思った。それは、家族にできることをスタッフがやると「何で家族ができることまでやっちゃうのか？」という思いをもつかもしいし、家族が関わるチャンスを奪ってしまうかもしれないからであった。

家族に協力を依頼したところ、支援が得られた。そうした支えがあつて運転免許を取得することができたが、このときに、サポステではみんなでお祝いをした。こうした経験を通して、サポステで仲間ができた実感した。その後、夏祭りでかき氷や農業体験をするなどして、少し厳しいことも体験できるようになった。フットサルの大会や、職トレでスーパーに清掃に行くなどした。この

なかで、ごみの選別工場に行ったが、そこでいろいろな人が働いていて、その職場の人たちがいろいろな面倒見てくれたので、「俺って大切にされている!？」と思うようになったという。

当時、サポステに 20 歳になった人が何人にかいたので、成人式もみんなで行った。同級生には会えないけど、高校には行きたいと言った。苦手な英語はアルファベットからやり、数学は中 1 の正負の計算からていねいに学び直しをし、受験して合格した。ただ、中学校に卒業証明書を取りに行くのは体が動かないということで、できなかった。サポステのスタッフも「ここは本人が行かなくても良いかな」と思って、中学校の卒業証書は親にとりに行ってもらった。現在、定時制高校の 4 年生になった。休日には引越しのアルバイトをしている。

まとめ及び考察

本研究では、地域若者サポートステーション（サポステ）を利用している若者がどのような実態で、スタッフからどのような支援を受け、どのように社会とつながりをもてるようになったかという点について明らかにした。その結果、サポステを利用する若者は、抱えている困難の状態や本人が希望する社会とのつながり方は個別に異なっていたが、サポステを利用する中で自信を取り戻し、少しずつ社会と「つながり」をもてるようになっていたことは共通していた。

こうした若者の変化を生み出すことができるサポステの活動は、就労に向かって一直線に進んでいくといったものではなく、むしろ利用者の「好きな活動」からスタートし、時機をとらえて活動を変化させていた。特に、居場所となる場所での遊び的な活動や、地域の同世代の若者との交流など、就労支援とは一見すると無縁であるような活動への参加が重要であったという点に特徴が認められる。

これは、サポステの目的は、最終的には就労し、経済的に自立することであるが、そこに至る過程においては、就労支援に特化するのではなく、広く青年期の自立を支える取り組みが必要であるということを示していると考えられる。そして、こうした支援を展開することができていたのは、サポステのスタッフが、単に就労支援プログラムを紹介し、体験的な活動と利用者を「つなぐ」役割を果たすというだけではなく、利用者と一緒に電車に乗ってみたり、一緒に利用者の成人を祝うなど、密接に関わりをもっていたことがとても大きかったと考える。

そして、社会参加に困難を抱える若者に対するこうしたサポステの支援には、教育学的な用語を用いれば「生活指導」的な関わりがあるといえるのではないだろうか。すなわち、ニートやひきこもりの状態を続けてきた若者が社会とつながろうとするためには、サポステの利用者と適度な距離を保ちつつ、寄り添い続けるといった相談支援の力量がスタッフに求められると考える。

実際に、本研究においてインタビューを行ったサポステのスタッフは、長年、その地域で教師をしており、そこで培った質の高い指導技術を有していた。そして、事例を検討する際に、そうした技術をそれとなく他のスタッフに話し、伝えていた。今回の事例はこうしたスタッフのいるサポステだからこそ、社会との「つながり」をつくることができたと考えられることもできるだろう。これは、若者支援において指導技術の優位性を指摘しているのではなく、福祉や労働の分野においても教育分野の質の高い技術は越境し、効果的な実践を生み出すことができるということの意味している

考える。逆に言えば、サポステを利用する若者の事例から、学校教育においてどのような支援を展開していくことが求められるのかを考える契機としなければならないということもできるだろう。

以上のように、就労支援を必要とする若者に対し、福祉や労働の分野と教育分野は隣接し合っていて、「青年の自立を支える」という点において重なり合っている。これは、一人の若者がある年齢に到達したら、すべての課題や困難が福祉や労働に移行するというものではないという視点から考えれば、極めて当然の帰結であるといえるだろう。本研究において、サポステが、単なる「つなぎ」（連携）の役割ではなく、多職種の専門領域を重ね合わせて「自分の可能性に気づく過程」を創り出す実践を行っていることを明らかにした。今後、こうした取り組みの中で、若者の内面がどのように変化すると、社会との「つながり」を自らもとうとし、それを維持していこうとするのかという点についてさらに精緻な検討が必要であると考えられる。

注

- 1) 以下の厚生労働省HPを参照した。

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/shokugyounouryoku/for_worker/ys-station/index.html.

- 2) 厚生労働省委託事業 さがみはら若者サポートステーション事業については以下のホームページを参照した。 <http://parasute.jp/>

なお、利用者の多くは神奈川県や相模原市の人であるが、明確な支援対象区域が設定されているわけではなく、隣接している東京都（主として町田市）からの利用者もいる。

- 3) 連携先は連携先 《就労支援機関》《保健福祉機関》《障害者支援機関》《生活福祉機関》《地域の機関》《教育機関》《子ども・若者支援機関》《NPO・市民団体等》などである。

引用文献

- 井上慧真. 2016. 『移行の危機』にある若者への支援の形成と変容—社会関係資本の観点から— 『社会学評論』 67 (2), 222-237.
- 小山田建太. 2017. 「社会資源としての地域若者サポートステーションの検討—事業の変遷に見るワークフェアの理念」 『筑波大学教育学系論集』 41 (2), 63-75.
- 厚生労働省アフターサービス推進室. 2016. 「ひきこもり地域支援センター設置運営事業に関する調査」. http://www.mhlw.go.jp/iken/after-service-vol22/dl/after-service-vol22_houkoku.pdf (最終アクセス日: 2018年7月27日)
- 田中満. 2014. 「地域若者サポートステーションの課題」 『岩手県立大学社会福祉学部紀要』 16, 59-65.
- 中村奈々・橋本創一. 2016. 「コミュニケーションに困難さのある青年支援を考える: 地域若者サポートステーションの調査研究」 『東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要』 12, 39-47.

- 南出吉祥. 2017. 「『若者支援』の担い手の多様性：地域若者サポートステーション事業の展開から」『岐阜大学地域科学部研究報告』41, 127-143.
- 村上純一. 2013. 「教育委員会による包括的若者支援政策とその可能性—北海道札幌市の『地域若者サポートステーション事業』を素材として」『東京大学大学院教育学研究科教育行政論叢』33, 67-75.

謝辞

本研究を進めるにあたり、「さがみはら若者サポートステーション」のスタッフの方々にはインタビュー調査や資料のご提供に多くの協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

付記

本研究は科学研究費補助金（基盤研究C・課題番号 16K04503：研究代表者・湯浅恭正）を受けて行われた研究の成果報告の一部である。